

春昼後刻

泉鏡花

青空文庫

二十四

この雨は間もなく霽れて、庭も山も青き天鷲絨に蝶花の刺繡ある霞を落した。何んの余波やら、庵にも、座にも、袖にも、菜種の薫が染みたのである。

出家は、さて日が出口から、裏山のその蛇の矢倉を案内しよう、と老実やかに勧めたけれども、この際、観音の御堂の背後へ通り越す心持はしなかったので、挨拶も後日を期して、散策子は、やがて庵を辞した。

差当り、出家の物語について、何んの思慮もなく、批評も出来ず、感想も陳べられなかったので、言われた事、話されただけを、不残鵜呑みにして、天窓から詰込んで、胸が膨れるまでになったから、独り静に歩行しながら、消化して胃の腑に落ちつけようと思つたから。

対手も出家だから仔細はあるまい、（さようなら）が些と唐突であつたかも知れぬ。ところで、石段を背後にして、行手へ例の二階を置いて、吻と息をすると……、

「転寐に……」

と先ず口の裏うちでいつて見て、小首を傾けた。杖ステッキが邪魔なので腕かいの処へ揺り上げて、引ひきつ込んだその袖そでともに腕組をした。菜種はなみちの花道、幕の外の引込ひっこみには引立たない野郎姿やろうすが。
雨上りで照々てかてかと日が射すのに、薄く一面にねんばりした足許あしもと、這すべつて転ばねば可よい。

「恋しき人を見てしより……夢てふものは、」

とちよいと顔を上げて見ると、左の岨がけから椎しいの樹が横に出ている——遠くから視ながめると、これが石段の根を仕切る緑なので、——庵室あんじつはもう右手めでの背後うしろになった。

見たばかりで、すぐにまた、

「夢と言たえば、これ、自分も何んだか夢を見ているようだ。やがて目が覚さめて、ああ、転う寐たねだつたと思おもえば夢だが、このまま、覚めなければ夢ではなからう。何時いつか聞いた事がある、狂人きやうがいと真人間まにんげんは、唯ただ時間の長短だけのもので、風が立つと時々波が荒れるように、誰でもちよいちよいは狂気きやうがいだけれど、直ぐ、風なぎになって、のたりのたりかなで済む。もしそれが静まらないと、浮世の波に乗つかつて我々、ふらふらと脳が揺れる、木き静まらんと欲すれども風やまずと来た日にや、船に酔えう、その浮世の波に浮んだ船に酔うのが、たちどころに狂人きやうがいなんだと。

けんのんけんのん
危険々々。

ト来た日にや夢もまた同一だろ。目が覚めるから、夢だけれど、いつまでも覚めなけりや、夢じやあるまい。

夢になら恋人に逢えると極れば、こりや一層夢にしてしまつて、世間で、誰某は？と尋ねた時、はい、とか何んとか言つて、蝶々二つで、ひらひらなんぞは悟つたものだ。

庵室の客人なんぎ、今聞いたようだと、夢てふものを頼み切りにしたのかな。――と考えが道草の蝶に誘われて、ふわふわと玉の緒が菜の花ぞいに伸びた処を、風もないのに、颯とばかり、横合から雪の腕、緋の襟で、つと爪尖を反らして足を踏伸ばした姿が、真黒な馬に乗つて、蒼空を翻然と飛び、帽子の廂を掠めるばかり、大波を乗つて、一跨ぎに紅の虹を躍り越えたものがある。

はたと、これに空想の前途を遮られて、驚いて心付くと、赤棟蛇のあとを過ぎて、機を織る婦人の小家も通り越していたのであつた。

音はと思うに、きりはたりする声は聞えず、山越えた停車場の笛太鼓、大きな時計のセコンドの如く、胸に響いてトトンと鳴る。

筋向いの垣根かきねの際きわに、こなたを待ち受けたものらしい、鋏くわを杖ついて立つて、莞爾にこついで、のっそりと親仁おやしあり。

「はあ、もし今帰らせえますかね。」

「や、先刻は。」

二十五

その莞爾にこにこ々々の顔のまま、鋏くわを離した手を揉もんで、

「何んともハイ御ごしんせつに言わつせえて下せえやして、お庇かけ様さまで、私わし、えれえ手柄てがらして礼を聞いたでござりやすよ。」

「別に迷惑にもならなかったかい。」

と悠々ゆうゆうとしていった時、少なからず風采ふうさいが立上たちあがつて見えた。勿論もちろん、対手あいては件くだんの親仁おやしだけだ。

「迷惑どじころ処ではござりましねえ、かさねがさね礼を言われて、私わづ大つくありがたがられました。」

「じゃ、むだにならなかつたかい、お前さんが始末をしたんだね。」

「竹ン尖で^{さき}圧^{おさ}えつけてハイ、山の根つこ^{やぶ}さ敷の中へ棄てたでござえます。女中たちが殺すなと言^いうけえ。」

「その方が^{こころもち}心持が可^いい、命を取つたんだと、そんなにせずとも事を、私が^{わたし}訴人^{そにん}したんだから、怨^{うら}みがあれば、こつちへ取付^{とつ}くかも分らずさ。」

「はははは、旦那様の前だが、やつぱりお好きではねえでがすな。奥にいた女中は、蛇がと聞^きいただけでアレソレ打騒^{ぶつさわ}いで戸障子^{としようじ}へ当^{あた}つただよ。」

私^{わし}先^に庭^に口^{わぐち}から入^いつて、其^{そこ}処^{えんがわ}さ縁^{えんがわ}側^{がわ}で案内^{あんねえ}して、それから台所^{だいどころ}口^{ぐち}に行^いつてあつ

ちこつち探索^{とくさく}のした処^{ところ}、何^{なに}が、お前様御勘考^{ごかんこう}さ違^{ちが}わねえ、湯殿^{ゆどの}に西^{すい}の隅^{すみ}に、べいらべいら舌^はさあ吐^はいとるだ。

思^{おも}つたより大^でうがした。

畜生^{ちくせい}め。われさ行^{ぎやう}水^{すい}するだら蛙飛込^{かえりびこ}む古池^{ふるいけ}というへ行^いけさ。化粧部屋^{けしょうぶ}覗^{のぞ}きおつて

白粉^{おしろい}つけてどうしるだい。白鷺^{しらさぎ}にでも押惚^{おつぼ}れたかと、ぐいとなやして動かさねえ。ど

うしべいな、長アくして思案^{しあん}のしていりや、遠くから足の尖^{さき}を爪立^{つまだ}つて、お殺^{ころ}しでない、打棄^{うちや}つておくれ、御新姐^{ごしんぞ}は病氣^{びやうき}のせいで物事^{ものごと}氣^きにしてなんねえから、と女中^{にようちゆう}たちが口

を揃そろえていうもんだでね、芸げもねえ、殺せつ生しょうするにや当らねえでがすから、藪やぶ畳たたみへ潜もぐらして退のけました。

御新姐ごしんぞは、気分が勝すぐれねえとつて、二階に寝てござらしけえ。

今しがた小雨こさめが降つて、お天氣が上ると、お前めえ様、雨よりは大きい紅べにいろ色の露がぽつたりぽつたりする、あの桃の木の下とこの許こさ、背戸口せどぐちから御新姐ごしんぞが、紫色の蝙蝠傘こうもりがささして出てござつて、(爺じいやさん、今ほどはありがとう。その厭いやなものいた事を、通りがかりに知らして下すつたお方は、巖いわ殿の方へおいでなすつたというが、まだお帰りになつた様子はなにかい。)ツて聞かした。

(どうだかね、私わし、内方うちかたへ参つたは些ちいとの間まだし、雨に駈かけ出しても来さつしやらねえもんだで、まだ歸らつしやらねえでござえましよう。

それとも身軽でハイずんずん行かつせえたもんだで、山越なごえしに名越なごえの方だき出さつしやつたかも知れましねえ、)言うたらばの。

(お見上げ申したら、よくお礼を申して下さいよ。)ツてよ。

その溝とびこさ飛越とびこして、その路みちを、一

垣おんなじの外とおりのこなたと同一おんなじ通筋。

「ハイぶうらりぶうらり、谷戸やとの方へ、行かしつけえ。」

と言いかけて身体からだごと、この巖殿いわどから櫃かしの原へ出口の方へ振向いた。身の挙動こなしが仰ぎよう山さんで、さも用ありげな素振そぶりだったので、散策子もおなじくそなたを。……帰途かえるさの渠かれにはあたかも前途ゆくてに当る。

「それ見えるでがさ。の、彼処あそこさ土手の上にござらっしゃる。」

錦にしきの帯を解いた様な、媚めかしい草の上、雨のあとの薄うすがすみ霞うす、山の裾すそに霞たなび々うちの中に一張つちようの紫大さき月輪むらさきの如く、はた菫すみれの花束に似たるあり。紫羅傘しらすんと書いていちちはちの

花、字の通りだと、それ美人の持物。

散策子ひとめは一目見て、早く既にその霞かすみの端の、ひたひたと来て膚はだに絡まとうのを覚えた。

彼処かしことこなたと、言い知らぬ、春の景色の繋がる中へ、蕨わらびのような親仁おやじの手、無骨な指ゆびさしで指して、

「彼処あそこさ、それ、傘かさの陰に憩やすんでござる。はははは、礼を聞かつせえ、待つてゐるだに。」

二十六

横に落した紫の傘には、あの紫苑しおんに来る、黄金色こがねいろの昆虫つばさの翼の如き、煌々きらきらした日の光が射い込んで、草に輝くばかりに見える。

その蔭かげから、しなやかな裳もすてが、土手の翠みどりを左右へ残して、線もなしに、よろけ縞じまのお召め縮緬しちりめんで、嬌態しなよく仕切ったが、油のようにとろりとした、雨のあとの路みちとの間、あるかなしに、細い褌つまさき先が柔かくしつとりと、内端うちわに搔か込んだ足袋たびで留とまって、其処そこから襦じゆば袢はんの友染ゆうぜんが、豊かに膝まで捌さばかれた。雪駄せつたは一ツ土に脱いで、片足はしなやかに、草に曲まがっているのである。

前を通ろうとして、我にもあらず立淀たちよどんだ。散策子さんさくしは、下衆げしゅう儕はいと賭物かけものして、鬼が出る宇治橋うじばしの夕暮たぐきを、唯一騎ただいっき、東へ打たする思おもがした。

かく近づいた跽音あしおとは、件の紫の傘を小楯こたてに、土手へかけて悠然ゆうぜんと臚おぼろげに投げた、艶えんにして凄すごい緋ひの袴はかまに、小波さざなみ寄する微な響きさえ与えなかつたにもかかわらず、こなたは一ツ胴震どうふるいをして、立直たちなおって、我知らず肩を聳そびやかすと、杖ステッキをぐいと振って、九字くじを切りかけて、束々つかつかと通った。

路は、あわれ、鬼の脱いだその沓くつを跨またがねばならぬほど狭いので、心から、一方は海の方かたへ、一方は櫃かしわばら原の山里へ、一方は来し方この巖殿いわどになる、久能谷くのやのこの出口は、あた

かも、ものの撞木しゅもくの形。前は一面の麦むぎ 畠はたけ。

正面に、青麦あおむぎに対した時、散策子の面おもてはあたかも酔えるが如きものであった。
南無三寶声なむさんぼうがかかった。それ、言わぬことではない。

「……………」

一 散いっさんに遁にげもならず、立停たちどまった渠かれは、馬の尾に油を塗って置いて、驚おどろ 掴つかみの掌たなそこを
迂すべり抜けくちおしなんだを口惜くちおしく思つたろう。

「私わたし。」

と振返つて、

「ですかい、」と言いつつ一目見たのは、頭禿かみむらうに齒豁はあらわなるものではなく、日の光射さす紫の
かげを籠こめた俤おもかげは、几帳きちように宿る月の影、雲の鬢びんず、簪かんざしの星、丹花たんかの唇、芙蓉ふようの毗まなじり、柳の腰
を草くさに縋すがつて、鼓草たんぽぽの花に浮べる状さま、虚空にかかった装よそおいである。

白魚しらおのような指が、ちよいと、紫紺しこんの半襟はんえりを引き合わせると、美しい瞳ひとみが動いて、

「失礼を……」

と唯莞爾ただっこりする。

「はあ、」と言つたきり、腰のまわり、遁にげ路みちを見て置くのである。

「貴下あなたお呼び留め申しまして、」

とふつくりとした胸を上げると、やや凭れもたかかつて土手に寝るようにしていた姿を前へ。

「はあ、何、」

まっしょうじき
真正直な顔をして、

「私ですか、」と空とぼける。

「貴下あなたのようなお姿だ、と聞きましたてございます。先刻せんこくは、真まに御心配下さいまして、」

徐ゆるら、雪のような白足袋しろたびで、脱ぎ棄はなてた雪駄せつたを引寄せた時、友染ゆうぜんは一層はらはらと、

模様もようの花が俤おもかげに立って、ぱツと留南奇とめきの薫かおりがする。

美女たおやめは立直たちなおって、

「お蔭かげ様で災難さいなんを、」

と襟首えりくびを見せてつむりを下げた。

爾時そのとき独武者ひとりむしや、杖ステッキをわきばさみ、兜かぶとを脱いで、

「ええ、何んですかな、」と曖昧あいまい。

美女たおやめは親しげに笑いかけて、

「ほほ、私わたしはもう災難と申します。災難ですわ、貴下あなた。あれが座敷へでも入りますか、知

らないでいて御覧なさいまし、当分家を明渡して、何処かへ参らなければなりません。
 真個にそうになりましたら、どうしましょう。お庇様で助りましてございますよ。あり
 がとう存じます。」

「それにしても、私と極めたのは、」

と思うことが思わず口へ出た。

これは些と調子はずれただったので、聞き返すように、

「ええ、」

二十七

「先刻の、あの青大將の事なんでしょう。それにしても、よく私だというのが分りましたね、驚きました。」

と棄鞭の遁構えで、駒の頭を立直すと、なお打笑み、

「そりや知れますわ。こんな田舎ですもの。そして御覧の通り、人通りのない処じやありませんか。」

貴下あなたのような方かたの出入ではいりは、今朝けさツからお一人しかありませんもの。丁ちゃんと存じておりますよ。」

「では、あの爺じいさんにお聞きなすつて、」

「否いいえ、私わたしども石垣いしがきの前をお通りがかりの時、二階にがいから拝おがみました。」

「じゃあ、私が青大将を見た時に、」

「貴下あなたのお姿すがたが楯たてにおなり下さいましたから、爾そのとき時も、厭いやなものを見ないで済すみました。」

と少し打うち傾かたむいて懷なつかしそう。

「ですが、貴女あなた、」とうっかりいう、

「はい？」

と促うながすように言いかけられて、ハタと行ゆき詰つまつたらしく、杖ステッキをコツコツと瞬またなほと一ツ、唇くちびるを引ひき緊きめた。

追おっかけて、

「何なんでございますか、聞きかして頂ちやうだい戴だい。」
と婉然えんぜんとする。

慌^{あわ}て気味に狼狽^{まご}つきながら、

「貴女^{あなた}は、貴女^{あなた}は気分が悪くって寝ていらつしやるんだ、というじやありませんか。」

「あら、こんなに甲羅^{こうら}を干^ほしておりますものを。」

「へい、」と、綱^{つな}は目^めを睜^{みは}つて、ああ、我ながらまずいことを言つた顔^{がん}色^{しよく}。

美女^{たおやめ}はその顔^{さし}を差^さ覗^{のぞ}く風情^{ふぜい}して、瞳^{ひとみ}を斜^{ひとみ}めに衝^つと流^{なが}しながら、華奢^{きゃしゃ}な掌^{たな}を軽^{そこ}く頬^{かほ}に当^{あた}てると、紅^{くれない}がひらりと搦^{から}む、腕^{かいな}の雪^{ゆき}を払^はう音^{おと}、さらさらと衣摺^{きぬず}れして、

「真個^{まったく}は、寝ていましたの……」

「何^{なん}んですって、」

と苦^{にが}笑^{わらい}。

「でも爾^{そのとき}時は寝^ねていやしませんの。貴下^{あなた}起きていたんですよ。あら、」

とやや調子^{ちようしだか}高^{たか}に、

「何を言^いつてゐるんだかわらないわねえ。」

馴^{なれ}々^{なれ}しくいうと、急に胸^そを反^そらして、すつきりとした耳^{みみ}許^{もと}を見せながら、顔^{かほ}を反^そ向^む

けて俯^{うつむ}向^むいたが、そのまま身体^{からだ}の平均^{へいきん}を保^{たも}つように、片足^{ひとあし}をうしろへ引^ひいて、立^{たち}直^{なお}つて、

「否^{いいえ}、寝^ねていたんじゃないやなかつたんですけども、貴下^{あなた}のお姿^{すがた}を拝^をみますと、急^{いそ}に心^{こころ}持^{もち}が

悪くなつて、それから寝たんです。」

「これは酷い、酷いよ、貴女は。」

棄て身に衝と寄り進んで、

「じや青大将の方が増だつたんだ。なのに、わざわざ呼留めて、災難を免れたとまで事を

誇大にして、礼なんぞおつしやつて、元来、私は余計なお世話だと思つて、御婦人ばかり

の御住居だと聞いたにつけても、いよいよ極が悪くつて、此処だつて、貴女、こそこそ遁

げて通ろうとしたんじやありませんか。それを大袈裟に礼を言つて、極を悪がらせた上に、

姿とは何事です。幽霊じやあるまいし、心持を悪くする姿というがありますか。図

体とか、状とかいうものですよ。その私の図体を見て、心持が悪くなつたは些と烈しい。

それがために寝たは、残酷じやありませんか。

要らんおせっかいを申上げたのが、見苦しかったらそうおつしやい。このお関所をあや

まつて通して頂く——勧進帳でも読みましようか。それでいけなけりや仕方がない。

元の巖殿へ引返して、山越で出奔する分の事です。」

と逆寄せの決心で、そう言つたのをキツカケに、どかと土手の草へ腰をかけたつもりの

処、負けまい氣の、魔ものの顔を見詰めていたので、横ざまに落しつけるはずの腰が据ら

ず、床しょうぎ几すべをなつて、ずるりと大地へ。

「あら、お危あぶない。」

というが早いまばゆか、眩くらいばかり目の前へ、霞かすみを抜けた極ごく彩色さいしき。さそくに友染ゆうぜんの膝を乱みだして、繕つくろいもなくはらりと折敷おりしき、片手が踏み抜いた下駄げた一ツ前壺まえつぼを押して寄越よこすと、扶たすけ起すつもりであろう、片手が薄色はんなけちの手巾ごと、ひらめいて芬ぶんと薫かおって、優やさしく男の背そびらにかかった。

二十八

南無観世音大菩薩……助けさせたまえと、散策子さんさくしは心の裏うち、陣じん備ぞなえも身構みがまえもこれにて粉こなになる。

「お足袋たびが泥だらけになりました、直じき其処そこでござんすから、ちよいとおいすがせ申しましよう。お脱ぬぎ遊あそばせな。」

と指をかけようとする爪尖つまさきを、慌あわしく引込ひっこませるを拍子ひょうしに、体たいを引いて、今度は大だ丈夫いじょうぶに、背中を土手へ寝るばかり、ばたりと腰かを懸かける。暖あたい草かが、ちりげもとで赫かつと

ほてつて、汗びつしより、まっかな顔をしてかつ目をきよろつかせながら、

「構わんです、構わんです、こんな足袋たびなんぞ。」

ヤレまた落語ぜんざの前座ぜんざが言いそうなことを、とヒヤリとして、漸やっと瞳ひとみを定めて見ると、美女たは刎はね飛とんだ杖ステッキを拾おひつて、しなやかに両手でついて、悠々ゆうゆうと立っている。

羽織はおりなしの引ひかけ帯おび、ゆるやかな衿あわせの着きこなしが、いまの身じろぎで、片前かたまえ下さりに友染ゆぜんの紅くれない匂においこぼれて、水色みずいろ縮ちりめん緬あわせの扱し帯きの端はし、ややずり下さがつた風情ふぜいさえ、杖ステッキには似合おもわないだけ、あたかも人質ひとしに取られた形——可哀かわいや、お主しゆうの身がわりに、恋の重荷おもでへし折れよう。

「真個ほんとに済みませんでした。」

またぞろ先せんを越して、

「私わたし、どうしたら可いいでしょう。」

と思案なずる目を半なかば閉じて、屈託くつたくらしく、盲目めくらが歎たんそく息をするように、ものあわれな装よそおいして、

「うっかり飛んだ事を申上げて、私、そんなつもりで言つたんじやありませんわ。」

貴下あなたのお姿を見て、それから心持こころもちが悪くなりましたって、言通ことばとおりの事が、もし

真個^{まっこう}なら、どうして口へ出して言えますもんですか。貴下^{あなた}のお姿を見て、それから心持が悪く……」

再び口の裏で繰返して見て、

「おほほ、まあ、大概^{たいがい}お察し遊ばして下さいましなね。」

と樂にさし寄って、袖^{そで}を土手へ敷いて凭^{もた}れるようにして並べた。春の草は、その肩あたりを翠^{みどり}に仕切つて、二人の裾^{すそ}は、足許^{あしもと}なる麦畠に臨んだのである。

「そういうつもりで申上げたんでござんせんことは、よく分つてますじやありませんか。」

「はい、」

「ね、貴下^{あなた}、」

「はい、」

と無意味に合点^{がってん}して頷^{うなず}くと、まだ心が済まぬらしく、

「言^{ことば}とがめをなすつてさ、真個^{ほんと}にお人が悪いよ。」

と異^{おつ}に搦^{から}む。

聊^{いささ}か弁ぜざるべからず、と横に見向いて、

「人の悪いのは貴女^{あなた}でしょう。私^{わたし}は何も言^{ことば}とがめなんぞした覚えはない。心持が悪いとお

つしやるからおつしやる通りに伺うかがいました。」

「そして、腹をお立てなすつたんですもの。」

「否いや、恐縮おそくをしたまでです。」

「そこは貴下あなた、お察し遊ばして下さる処ところじやありませんか。
ことば

言の綾あやもございますわ。朝顔の葉を御覧なさいまし、表はあんなに薄っぺらなものです
が、裏はふつくりしておりますもの……裏を聞いて下さいよ。」

「裏だと……お待ちなさいよ。」

ええ、といきつぎに目を瞑ねむつて、仰向あおむいて一呼吸ひといきついて、

「心こころ持もちが悪くなつた反対かへんなんだから、私の姿を見ると、それから心持よが善よくなつた――

――事になる――可いい加減かげんになさい、馬鹿になすつて、」

と極きめつける。但ただし笑わらいながら、

清すずしい目で屹きつと見て、

「むずかしいのね？ どう言えばこうおつしやつて、貴下あなた、弱よわいものをおいじめ遊ばすも
んじやないわ。私わたしは煩わづらっているんじやありませんか。」

草に手をついて膝をずらし、

「お聞きなさいましよ、まあ、」

と恍惚うつとりしたように笑えみを含む口許くちもとは、鉄漿かねをつけていはしまいかと思われるほど、
 娜だめいたものであつた。

「まあ、私に、恋なつかしい方かたがあるとしましようね。可ようござんすか……」

二十九

「恋なつかしい方かたがあつて、そしてどうしても逢あえないで、夜も寐ねられないほどに思い詰めて、心も乱れれば氣も狂いそうになつておりますものが、せめて肖にたお方でもと思うのに、この頃はこうやつて此処ここらには東京からおいでなすつたらしいのも見えません処ところへ、何年ぶりか、幾月いくつき越こか、フトそうらしい、肖にた姿をお見受け申したとしましたら、貴下あなた、

と手許てもとに丈たけのびた影のある、土筆つくしの根を摘つみ試こころみ、
 「爾時そのときは……、そして何んですか、切せつなくつて、あとで臥ふせつたと申しますのに、爾時そのときは、どんな心持こころもちでと言つて可いいのでございましようね。」

やつぱり、あの、厭いやな心持になつて、というほかはないではありませんか。それを申し
たんでございますよ。」

「一言いちごんもなく……しばらくして、

「じゃ、そういう方かたがおあんなさるんですね、」と僅わずかに一方いっぽうへ切抜きりぬけようとした。

「御存じの癖くせに。」

と、伏兵ふくへい大いに起る。

「ええ、」

「御存じの癖に。」

「今お目にかかったばかり、お名も何も存じませんのに、どうしてそんな事が分ります。」
うたゝ寐ねに恋しき人を見てしより、その、みを、という名も知らぬではなかったけれど
も、夢のいわれも聞きたさに。

「それでも、私が気疾きやみをしております事を御存じのようでしたわ。先刻さつき、」

「それは、何、あの畑打はたうちの爺じいさんが、蛇をつかまえに行つた時に、貴女あなたはお二階に、と
言つて、ちよつと御様子を漏もらしただけです。それも唯ただ御氣分が悪いとだけ。

私の形を見て、お心持が悪くなつたなんぞつて事は、些ちつとも話しませんから、知ろう道ど

理はないのです。但礼をおつしやるかも知れんというから、其奴は困ったと思いましたけれども、此処を通らないじや帰られませんかんですから。こうと分つたら穴へでも入るんだつて。お目にかかるのじやなかったんです。しかし私が知らないで、二階から御覧なすつただけは、そりや仕方がない。」

「まだ、あんな事をおつしやるよ。そうお疑いなさるんなら申しましよう。貴下、このまあ麗かな、樹も、草も、血があれば湧くんでしよう。朱の色した日の光にほかほかと、土も人膚のように暖うござんす。竹があつても暗くなく、花に陰ありません。燃えるようにちらちら咲いて、水へ散つても朱塗の杯になつてゆるゆる流れましよう。海も真蒼な酒のようで、空は、」

と白い掌を、膝に仰向けて打仰ぎ、

「緑の油のよう。とろとろと、曇もないのに淀んでいて、夢を見ないかと勧めるようですわ。山の形も柔かな天鷲絨の、ふつくりした括枕に似ています。そちこち陽炎や、糸遊がたきしめた濃いたきもののように靡くでしょう。雲雀は鳴こうとしているんですよ。鶯が、遠くの方で、低い処で、こちらにも里がある、楽しいよ、と鳴いています。何不足のない、申分のない、目を瞑れば直ぐにうとうとと夢を見ますような、この春

の日中^{ひなか}なんでございますがね、貴下^{あなた}、これをどうお考えなさいますえ。」

「どうと言つて、」

ことば
と言に連れられた春のその日中^{ひなか}から、瞳^{ひとみ}を美女^{たおやめ}の姿にかえた。

貴下^{あなた}は、どんなお心持がなさいますえ、」

「……………」

お樂^{たのし}みですか。」

「はあ、」

お嬉^{うれ}しゅうございますか。」

「はあ、」

お賑^{にぎや}かでございますか。」

貴女^{あなた}は？」

「私は心持が悪いんでございます、丁ど貴下^{あなた}のお姿を拝みました時のように、」

と言^ほいかけて吻と小^こさなといき、人質^{ステッキ}のかの杖を、斜めに両手で膝へ取った。情^{なさけ}の海に棹^{さおさ}す姿。思わず腕組をして熟^{じつ}と見る。

三十

「この春の日の日中の心持を申しますのは、夢をお話するようで、何んとも口へ出しては言えませんがね。どうでしょう、このしんとして寂しいことは。やっぱり、夢に賑かなところ処を見るようではごさんすまいか。二歳か三歳ぐらいの時に、乳母の背中から見ました、おまつり祭礼の町のようにも思われます。

何為か、秋の暮より今、この方が心細いんですもの。それでいて汗が出ます、汗じやなくってこう、あの、暖かさで、心を絞り出されるようですわ。苦しくもなく、切なくもなく、血を絞られるようですわ。柔かな木の葉の尖で、骨を抜かれますようではございませんか。こんな時には、肌が蕩けるのだって言いますが、私は何んだか、水になって、その溶けるのが消えて行きそうに涙が出ます、涙だって、悲しいんじゃないやありません、そうかと言つて嬉しいいんでもありません。

あの貴下、叱られて出る涙と慰められて出る涙とごさんすのね。この春の日に出ますのは、その慰められて泣くんです。やっぱり悲しいんでしょうかねえ。おなじ寂しさでも、秋の暮のは自然が寂しいので、春の日の寂しいのは、人が寂しいのではありませんか。

ああ遣つて、田圃にちらほら見えます人も、秋のだと、すっかりして、てんでんが景色の寂しさに負けないように、張合を持つてゐるんでしよう。見た処でも、しょんぼりした脚にも気が入つてゐるようですけれど、今しがたは、すっかり魂を抜き取られて、ふわふわ浮き上つて、あのまま、鳥か、蝶々にもなりそうですね。心細いようですね。暖い、優しい、柔かな、すなおな風にさそわれて、鼓草の花が、ふっと、綿になつて消えるように魂がなりそうなんですもの。極楽というものが、アノ確に目に見えて、そして死んで行くと同一心持なんでしょう。

楽しいと知りつつも、情ない、心細い、頼りのない、悲しい事なんじゃありませんか。そして涙が出ますのは、悲しくつて泣くんでしようか、甘えて泣くんでしようかねえ。私はずたずたに切られるようで、胸を搔きむしられるようで、そしてそれが痛くも痒くもなく、日当りへ桃の花が、はらはらとこぼれるようで、長閑で、麗で、美しくつて、それでいて寂しくつて、雲のない空が頼りのないようで、緑の野が砂原のようで、前生の事のように、目の前の事のように、心の内が言いたくつて、言われなくつて、焦つたくつて、口惜くつて、いらいらして、じりじりして、そのくせぼつとして、うっとり地の底へ引込まれると申しますより、空へ抱き上げられる塩梅の、何んとも言えない心持が

して、それで寝ましたんですが、貴下、^{あなた}」

小雨が晴れて日の照るよう、忽ち麗な^{たちまうらなか}おももちして、

「こう申してもやっぱりお気に障りますか。貴下のお姿を見て、心持が悪くなったと言いましたのを、まだ許しちや下さいませんか、おや、貴下どうなさいましたの。」

身動ぎもせず聞き澄んだ散策子の茫然とした目の前へ、紅白粉の烈しい流が眩い日の光で渦いて、くるくると廻っていた。

「何んだか、私も変な心持になりました、ああ、」

と掌で目を払って、

「で、そこでお休みになつて、」

「はあ、」

「夢でも御覧になりましたか。」

思わず口へ出したが、言い直した、余り唐突と心付いて、

「そういうお心持でうたた寐でもしましたら、どんな夢を見るでしょうな。」

「やっぱり、貴下のお姿を見ますわ。」

「ええ、」

「此処にこうやっておりますような。ほほほほ。」

と言ひ知らずあでやかなものである。

「いや、串 戯はよして、その貴女、恋しい、慕わしい、そしてどうしても、もう逢えない、とお言ひなすつた、その方の事を御覧なさるでしょうね。」

「その貴下に肖た、」

「否さ、」

ここで顔を見合せて、二人とも撈つていた草を同時に棄てた。

「なるほど。寂としたもんですね、どうでしょう、この閑さは……」

頂の松の中では、頻に目白が囀るのである。

三十一

「またこの櫃原というんですか、山の裾がすくすく出張つて、大きな怪物の土地の神が海の方へ向つて、天地に開いた口の、奥歯へ苗代田 麦 畠などを、引銜えた形に見えます。谷戸の方は、こう見た処、何んの影もなく、春の日が行渡つて、些と曇が

あればそれが霞かすみのような、長閑のどかな景色でいながら、何んだか厭いやな心こころもち持もの処ところですね。」

美女たおやめは身を震ふるわして、何故なぜか嬉うれしそうに、

「ああ、貴下あなたもその（厭いやな心持）をおつしやいましたよ。じゃ、もう私もそのお話をいたしましても差支さしつかえございませんのね。」

「可ようございます。ははははは。」

トちよつと更あらたまつた容ようす子すをして、うしろ見られる趣おもむきで、その二階家にかいやの前みちから路みちが一畝ひとつねり、矮ひくい藁屋わらやの、屋根にも葉にも一面の、椿つばきの花の紅くれないの中へ入いつて、菜畠なばたけへ纔わずかに頭あれ、苗代田なわしろだでまた絶えて、遙かに山の裾すその翠みどりに添そうて、濁あつた灰汁あの色をなして、ゆつたりと向うへ通じて、左右から突出つぎでた山でとまる。檀かしわ原はらの奥深く、蒸むし上あるように低く霞かすみの立つあたり、背中合せが停車場ステーションで、その腹へ笛太鼓ふえたいこの、異様に響く音ねを籠こめた。其そ処こへ、遙かに瞳ひとみを通かよせ、しばらく茫然ぼうぜんとした風情ふぜいであつた。

「そうですねえ、はじめは、まあ、心持こころもち、あの辺からだろうと思うんですわ、声が聞えて来きましたのは、」

「何んの声です?」

「はあ、私が臥ふせりまして、枕に髪をこすりつけて、悶もだえて、あせつて、焦じれて、つくづく

くやし口惜くつて、情なくつて、身がしびれるような、骨が溶けるような、心持でいた時でした。先刻の、あの雨の音、さあつと他愛なく軒へかかつて通りましたのが、丁ど彼処あたりから降り出して来たように、寝ていて思われたのでございます。

あの停車場の囃子の音に、何時か氣を取られていて、それだからでしょう。今でも停車場の人ごみの上へだけは、細い雨がかかっているように思われますもの。まだ何処にか雨氣が残っておりますなら、向うの霞の中でしょうと思ひますよ。

と、その細い、幽な、空を通るかと思ふ雨の中に、図太い、底力のある、そして、さびのついた塩辛声を、腹の底から押出して、

(ええ、ええ、ええ、伺います。お話はお馴染の東京世渡草、商人の仮声物真似。先ず神田辺の事でござりまして、ええ、大家の店前にござります。夜のしらしら明けに、小僧さんが門口を掃いておりますと、納豆、納豆——)

と申して、情ない調子になつて、

(ええ、お御酒を頂きまして声が続きません、助けて遣つておくんなさい。)

と厭な声が、流れ星のように、尾を曳いて響くんでございますの。

私は何んですか、悚然として寢床に足を縮めました。しばらくして、またその(ええ、

ええ、）という変な声が聞えるんです。今度は些と近くなつて。

それから段々あの櫃原の家を向い合いに、飛び飛びに、千鳥にかけて一軒一軒、何処でもおなじことを同一ところまで言つて、お錢をねだりますんでございますがね、暖い、ねんばりした雨も、その門附けの足と一緒に、向うへ寄つたり、こつちへよつたり、ゆるゆる歩行いて来ますようです。

その納豆納豆——というのだの、東京というのですの、店前だの、小僧が門口を掃いている処だと申しますのが、何んだか懐しい、両親の事や、生れました処なんぞ、昔が思い出されまして、身体を煮られるような心持がして我慢が出来ないで、掻巻の襟へ喰いついて、しつかり胸を抱いて、そして恍惚となつておりますと、やがて、些と強く雨が来て当ります時、内の門へ参つたのでございます。

（ええ、ええ、ええ、）

と言ひ出すじやございませんか。

（お話はお馴染の東京世渡草、商人の仮声物真似。先ず神田辺の事でござりました、ええ、大家の店さきでござります。夜のしらしらあけに、小僧さんが門口を掃いておりますと、納豆納豆——）

とだけ申して、

(ええ、お御酒^{みき}を頂きまして声が続きません、助けて遣^やつておくんない。)

と一分一厘^{ぶりん}おなじことを、おなじ調子でいうんですもの。私の門^{かど}へ来ましたまでに、遠くから丁^{ちよう}ど十三度^{たび}聞いたのでございます。」

三十二

「女中が直ぐに出なかつたんです。

(ねえ、助けておくんないな、お御酒^{みき}を頂いたもんだからね、声が續かねえんで、えへ、

えへ、)

厭^{いや}な咳^{せき}なんぞして、

(遣^やつておくんないよ、飲み過ぎて切^{せつ}ねえんで、助けておくんない、お願^{ねげ}えだ。)

と言^{ひとりごと}つて独^{ひとりごと}言^{こと}のように、貴^{あなた}下、

(遣^やり切^{きれ}ねえや、) ツて、いけ太^{ふとふと}々しい容^{ようす}子^こつたらないんですもの。其^{そこ}処^こらへ、ベツベツ睡^{つば}をしっかけていそうですわ。

小錢こぜにの音をちやらちやらとさして、女中が出そうにしましたから、

(光みつかい、光や、)

と呼んで、二階あがの上り口へ来ましたのを、押留おしとめるように、床とこの中から、

(何んだね、)

と自分でも些ちと尖とげとげ々々しく言つたんです。

(門附かどづけでございます。)

(芸人げいにんかい！)

(はい、)

ツて吃驚びっくりしていました。

(不可いけないよ、遣やつちや不可いけない。)

芸人なら芸人らしく芸をして錢おかしをお取り、とそうお言い。出来ないなら出来ないと言つ

て乞食こじきをおし。なぜまた自分の芸が出来ないほど酒を呑んだ、と言つてお遣やり。いけ酒しやあ壺

々々失礼しやあじゃないか。)

とむらむらとして、どうしたんですか、じりじり胸が煮え返るようで極きめつけますと、窃そつと蹙あしおと音を忍んで、光みつやは、二階を下りましたつけ。

お恥しゅうございますわ。

甲 高かったそうで、よく下まで聞えたと見えます。表一階にいたんですから。

(何んだって、)

と門口で喰つてかかるような声がしました。

枕をおさえて起上りますと、女中の声で、御病氣なんだからと、こそこそいうのが聞

えました。

あざけ
嘲るように、

(病人なら病人らしく死んじまえ。治るもんなら治ったら可からう。何んだって愚図ついで、煩っているんだ。)

と赭顔なのが白い歯を剥き出していうようです。はあ、そんな心持がしましたの。

(おお、死んで見せようか、死ぬのが何も、)とつと立つと、ふらふらして床を放れて倒れました。段へ、裾を投げ出して、欄干につかまった時、雨がさつと暗くなって、私

はひとりで泣いたんです。それツきり、声も聞えなくなつて、門附は何処へ参りましたか。雨も上つて、また明い日が当りました。何んですかねえ、十文字に小児を引背負つて跣足で歩いている、四十恰好の、巖乗な、絵に描いた、赤鬼と言った形のもののよ

うに、今こうやってお話をします内うちも考えられます。女中に聞いたのでもございませんに――

またもう寢床へ倒れツきりになりましょうかとも存じましたけれども、そうしたら気でも違いそうですから、ぶらぶら日向ひなたへ出て来たんでございます。

否いいえ、はじめてお目にかかりました貴下あなたに、こんなお話を申し上げまして、もう気が違っておりますのかも分りませんが、――

と言いかけて、心を籠こめて見詰めたらしい、目の色は美しかった。

「貴下あなた、真個ほんとうに未来というものはありますものでございましょうか知ら。」

「……………」

「もしあるものと極きまりますなら、地獄でも極楽でも構こいません。逢そいたい人が其処そこにいるんなら。さっさと其処へ行ゆけば宜よろしいんですけれども、――

と土筆つくしのたけの指白ゆびしろう、またうつつなげに草を摘つみ、摘つみ、

「きつとそうと極きまりませんから、もしか、死んでそれつきりになっては情なさけないんですもの。そのくらいなら、生きていて思い悩わづんで、煩わづらって、段々消えて行ゆきます方が、いくらか増ましだと思おもいます。忘れないで、何時いつまでも、何時いつまでも、――

と言いいい抜き取った草の葉をキリキリと白歯しろはで噛かんだ。

トタンに慌あわただしく、男の膝越ひざこしに衝つとのぼした袖そでの色も、帯の影も、緑の中に濃くなつて、活々いきいきとして蓮葉はすはなものいい。

「いけないわ、人の悪い。」

散策子は答こたえに窮きゆうして、実は草の上に位置も構わず投出なげだされた、オリイブ色の上表紙うわびょうしに、とき色のリボンで封のある、ノオトブックを、つまさぐつていたのを見たので。

三十三

「こつちへ下さいよ、厭いやですよ。」

と端はしへかけた手を手帳に控えて、麦むぎ 畠はたけへ真ま 正しょう 面めん。話をわきへずらそうと、青せい 紙いて

天あま 白はく 日にっに身構みくまえつつ、

「歌がお出来なさいましたか。」

「ほほほほ、」

と唯笑ただう。

「絵をお描きになるんですか。」

「ほほほほ。」

「結構ですな、お楽しみですね、些と拝見いたしたいもんです。」

手を放したが、附着いた肩も退けないで、

「お見せ申しましょうかね。」

あどけない状で笑いながら、持直してぱらぱらと男の帯のあたりへ開く。手帳の枚頁は、この人の手にあたかも蝶の翼を重ねたようであつたが、鉛筆で描いたのは……

一目見て散策子は蒼くなつた。

大小濃薄乱雑に、半ばかきさしたのもあり、歪んだのもあり、震えたのもあり、やめたのもあるが、○と□△ばかり。

「ね、上手でしょう。此処等の人たちは、貴下、玉脇では、絵を描くと申しますとき。この土手へ出ちゃ、何時までもこうしていますのに、唯いては、谷戸口の番人のようでおかしゅうござんすから、いつかツからはじめたんですわ。

大層評判が宜しゅうございますから……何ですよ、この頃に絵具を持出して、草の上で風流の店びらきをしようと思ひます、大した写生じやありませんか。

この円いのが海、この三角が山、この四角いのが田圃だと思えばそれでもようござんす。それから○い顔にして、□い胴にして△に坐っている、今戸焼の姉様だと思えばそれでも可うございます、袴を穿いた殿様だと思えばそれでも可いでしょう。

それから……水中に物あり、筆者に問えば知らずと答うと、高慢な顔色をしても可いんですし、名を知らない死んだ人の戒名だと思つて拝んでも可いんですよ。」

ようよう声が出て、

「戒名、」

と口が利ける。

「何、何んというんです。」

「四角院円々三角居士と、」

いいながら土手に胸をつけて、袖を草に、太脛のあたりまで、友染を敷乱して、すらりと片足片棲を泳がせながら、こう内へ搔込むようにして、鉛筆ですらすらとその三体の秘密を記した。

テンテンカラ、テンカラと、耳許に太鼓の音。二人の外に人のない世ではない。アノ椿の、燃え落ちるように、向うの茅屋へ、続いてぼたぼたと溢れたと思うと、菜種の路を

葉がくれに、真黄色な花の上へ、ひらりと彩^{いろど}って出たものがある。

茅屋^{かや}の軒^にへ、鶏^{わとり}が二羽舞^{まい}上^{あが}つたのかと思つた。

ふたつ^{ふたつ}の頭^{かしら}、獅子頭^{ししがしら}、高いのと低いのと、後^{あと}になり先になり、纏^{もつ}れる、狂う、花すれ、

葉ずれ、菜種^{なづな}に、と見るとやがて、足許^{あしもと}からそなたへ続く青麦^{はたけ}の畠^{はたけ}の端、玉脇^{たまわき}の門の前

へ、出て来た連獅子^{れんじし}。

汚^なれた萌黄^{もえぎ}の裁着^{たつけ}に、泥草鞋^{どろわらじ}の乾いた埃^{ほこり}も、霞^{かすみ}が麦^{こころぎ}にかかるよう、志^{どこ}して何処^{どこ}へ行^ゆ

く。早^{はや}その太鼓^{うちや}を打留^{うちや}めて、急^{いそぎ}足^{あし}に近づいた。いずれも子獅子^{こしし}の角兵衛^{かくべえ}大^{だい}小^{しょう}。小

さい方は八ツばかり、上は十三―四と見えたが、すぐに久能谷^{くのや}の出口^{ぐち}を突切^{つっき}り、紅白^{こうはく}の牡^ぼ

丹^{たん}の花^{はな}、はつと梯^{おもかけ}に立つばかり、ひらりと前^ゆを行き過ぎる。

「お待ちちよいと、」

と声をかけた美女^{たおやめ}は起直^{おきな}つた。今の姿をそのままに、雪駄^{せつた}は獅子^{しし}の蝶^{てつ}に飛ばして、

土手^{どて}の草^{くさ}に横坐^{よこざわ}りになる。

ト獅子^{しし}は紅^{くれない}の切^きを捌^{さば}いて、二つとも、立つて頭^{かしら}を向けた。

「ああ、あの、児^こたち、お待ちなね。」

テンテンテン、（大きい方が）トンと当てると、太鼓^おの面^{おも}に撥^{ばち}が飛^とんで、ぶるぶると細^{こまか}

に躍る。

「アリヤ」

小獅子は路へ橋に反った、のけ様の頤ふつくりと、二かわ目に紅を潮して、口許の可愛らしい、色の白い児であつた。

三十四

「おほほほ、大層勉強するわねえ、まあ、お待ちよ。あれさ、そんなに苦しい思いをして引くつかえらなくつても可いんだよ、可いんだよ。」

と圧えつけるようにいうと、ぴよいと立直つて頭の堆く大きく突出た、紅の花の廂の下に、くるツとした目を睜つて立つた。

ブルブルツと、跡を引いて太鼓が止む。

美女は膝をずらしながら、帯に手をかけて、揺り上げたが、

「お待ちよ、今お金を上るからね、」

手帳の紙へはしり書して、一枚手許へ引切つた、そのまま獅子をさし招いて、

「おいでおいで、ああ、お前ね、これを持って、その角の二階家へ行つて取つておいで。」
留守へ言いつけた為替と見える。

後馳せに散策子は袂へ手を突込んで、

「細いのならありますよ。」

「否、可うござんすよ、さあ、兄や、行つて来な。」

撥を片手で引つかむと、恐る恐る差出した手を素疾く引込め、とさかをはらりと振つて行く。

「さあ、お前こつちへおいで、」

小さな方を膝許へ。

きよとんとして、ものも言わず、棒を呑んだ人形のような顔を、凝と見て、

「幾歳なの、」

「八歳でござえス。」

「母さんはないの、」

「角兵衛に、そんなものがあるもんか。」

「お前は知らないでもね、母様の方は知つてるかも知れないよ、」

と衝と手を袴はかま越こに白くかける、とぐいと引寄せて、横抱きに抱くと、獅子頭ししがしらはばかりと仰向けあおむに地を払って、草鞋わらんじは高く反そった。鶏とりの羽はねの飾かざりには、椰子やしの葉を吹く風が渡る。

「貴下あなた、」

と落着おちついて見返つて、

「私の児こかも知れないんですよ。」

トタンに、つるりと腕かいなすべを這はつて、獅子は、倒さかにトンと返つて、ぶるぶると身体からだをふつたが、けろりとして突立つ立たった。

「えへへへへへ、」

此処ここへ勢いきおいよく兄獅子ひきかえが引返して、

「頂ういたい、頂ういたい。」

二つばかり天窓あたまを掉ふつたが、小さい方の背中を突いて、テンとまた撥ばちを当てる。

「可いいよ、そんなことをしなくつても、」

と裳もすそをずりおろすようにして止めた顔と、まだ掴つかんだままの大な銀貨おおきとを互たがいに見較みくらべ、二個ふたりともとぼんとする。時に朱盆しゅぼんの口を開いて、眼まなこを輝かがすものは何。

「そのかわり、ことづけたいものがあるんだよ、待っておくれ。」

とその○□△を楽書らくがきの余白へ、鉛筆を真直まっすぐに取ってすらすらと春の水の靡なびくさまに走らした仮名かなは、かくれもなく、散策子に読得よみえられた。

君とまたみるめおひせば四方よもの海うみの

水の底をもかつき見てまし

散策子さんさくしは思わず海の方かたを屹きつと見た。波は平たいかである。青麦せいばいにつづく紺青こんじょうの、水平線すいへいせん上雪ゆき一山いつさん。

富士の影なげが渚なぎさを打って、ひたひたと薄く被かぶさる、藍色あいいろの西洋館せいやうかんの棟高むねたかく、二、三羽鳩はとが羽はねをのして、ゆるく手巾ハンケチを掉ふり動かす状さまであつた。

小さく畳たたんで、幼い方おきなの手にその（ことづけ）を渡すと、ふツくりした頤おとがで、合点がてん々々がてんをすると思えたが、いきなり二階家の方ゆへ行こうとした。

使つかいを頼まれたと思つたらしい。

「おい、そつちへ行ゆくんじやない。」

と立入たちいつたが声を懸けた。

美女たおやめは莞爾にっこりして、

「唯持ただつて行いつてくれれば可いいの、何処どこへッて当あてはないの。落おしたら其処そこでよし、失くしたらそれッきりで可いんだから……唯心ただこころもち持もちだけなんだから……」

「じゃ、唯持ただつて行きや可いいのかね、奥さん、」

と聞ういて頷うなずくのを見て、年とし紀うえ上えだけに心こころ得え顔がで、危あぶつかしそうに仰あお向むいて吃びっくり驚きした風ふうでいる幼こい方の、獅し子し頭がしらを背うしろ後うしろへ引ひいて、

「こん中へ入いれとくだア、奴やつこ、大事だいじにして持もつとんねえよ。」

獅し子しが並ならんでお辞儀しぎをすしると、すたすたと駈かけ出でした。後あと白浪しらなみに海かの方たくれないほろへ翻ひるとして、青麦せいばいの根ねに霞かすみ行ゆく。

三十五

さて半時ばかりの後、散策子さんさくしの姿は、一人、彼処かしこから鳩はとの舞まうのを見みた、浜辺あひべの藍あい色いろの西洋館せいたうかんの傍かたわらなる、砂山すなの上うへに頭あたまれた。

其処そこへ来きると、浪打際なみうちぎわまでも行ゆかないで、太いたく草臥くたびれた状さまで、ぐツたりと先さきず足あしを投なげて腰こしを卸おろす。どれ、貴女あなたのために（ことづけ）の行方ゆくえを見届みとけましよう。連獅子れんしのあと

を追つて、というのをしおに、まだ我儘が言い足りず、話相手の欲しかったらしい美女に辞して、袂を分つたが、獅子の飛ぶのに足の続くわけはない。

一先ず帰宅して寝転ぼうと思つたのであるが、久能谷を離れて街道を見ると、人の瀬を造つて、停車場へ押懸ける夥しさ。中にはもう此処等から仮声をつかつて行く壮佼がある、浅黄の襦袢を膚脱で行く女房がある、その演劇の恐しさ。大江山の段か何か知らず、とても町へは寄附かれたものではない。

で、路と一緒に、人通の横を切つて、田圃を抜けて来たのである。

正面にくぎり正しい、雪白な霞を召した山の女王のましますばかり。見渡す限り海の色。浜に引上げた船や、畚や、馬秣のように散ばつたかじめの如き、いずれも海に対して、我は顔をするのではないから、固より馴れた目を遮りはせぬ。

かつ人一人いなければ、真昼の様な月夜とも想われよう。長閑さはしかし野にも山にも増つて、あらゆる白砂の俤は、暖い霧に似ている。

鳩は蒼空を舞うのである。ゆつたりした浪にも誘われず、風にも乗らず、同一処を

——その友は館の中に、ことごとと躑を踏んで、くくと啼く。

人はこういう処に、こうしていても、胸の雲霧の霽れぬ事は、寐られぬ衾と相違はな

い。

徒らに砂を握れば、くぼみもせず、高くもならず、他愛なくほろほろと崩れると、また傍からもり添える。水を掴むようなもので、搜ればはらとただ貝が出る。

渚には敷満ちたが、何んにも見えない処でも、纔に砂を分ければ貝がある。まだこの他に、何が住んでいようも知れぬ。手の届く近い処がそうである。

水の底を搜したら、渠がためにこがれ死をしたと言う、久能谷の庵室の客も、其処に健在であろうも知れぬ。

否、健在ならばという心で、君とそのみるめおひせば四方の海の、水の底へも潜ろうと、(ことづけ)をしたのであろう。

この歌は、平安朝に艶名一世を圧した、田かりける童に襖をかりて、あをかりしより思ひそめてき、とあこがれた情に感じて、奥へと言ひて呼び入れけるとなむ……名媛の作と思う。

言うまでもないが、手帳にこれをしるした人は、御堂の柱に、うたた寐の歌を楽書したとおなじ玉脇の妻、みを子である。

深く考うるまでもなく、庵の客と玉脇の妻との間には、不可思議の感応で、夢の契があ

つたらしい。

男は真先に世間外に、はた世間のあるのを知って、空想をして実現せしめんがために、身を以て直ちに幽冥に趣いたもののようであるが、婦人はまだ半信半疑でいるのは、それとなく胸中の鬱悶を漏らした、未来があるものと定り、靈魂の行末が極つたら、直ぐにあとを追おうと言った、言の端にも顯れていた。

唯その有耶無耶であるために、男のあとを追ひもならず、生長らえる効もないので。

そぞろに門附を怪しんで、冥土の使のように感じた如きは幾分か心が乱れている。意氣張らずで死んで見せように到つては、益々悩乱のほどが思い遣られる。

また一面から見れば、門附が談話の中に、神田辺の店で、江戸紫の夜あけがた、小僧が門を掃いている、納豆の声がした……のは、その人が生涯の東雲頃であつたかも知れぬ。——やがて暴風雨となつたが——

とにかく、(ことづけ)はどうなるう。玉脇の妻は、以て未来の有無を占おうとしたらしかつたに——頭陀袋にも納めず、帯にもつけず、袂にも入れず、角兵衛がその獅子頭の中に、封じて去つたのも氣懸りになる。為替してきらめくものを掴ませて、のつつ反ツつの苦患を見せない、上花主のために、商売冥利、随一大切な処へ、偶然受取

つて行つたのであろうけれども。

あれがもし、鳥にでも攫さらわれたら、思う人は虚空こくうにあり、と信じて、夫人は羽化うかして飛ぶであらうか。いやいや羊が食うまでも、角兵衛は再び引返ひきかえしてその音信おとずれは伝えまい。従つて砂を崩せば、従つて手にたまつた、色々の貝殻にフト目を留とめて、

君とまたみる目おひせば四方よもの海うみの……

と我にもあらず口ずさんだ。

更に答えぬ。

もしまたうつせ貝がいが、大いなる水の心を語り得るなら、渚に敷いた、いささ貝がいの花吹雪は、いつも私語ささやきを絶えせぬだろうに。されば幼児おさなごが拾つても、われらが砂から掘り出しても、このものいわぬは同一おなじである。

小貝こがいをそこで捨てた。

そうして横ざまに砂に倒れた。腰の下はすぐになだれたけれども、迂すべり落ちて埋うもれはせぬ。

しばらくして、その半眼はんがんに閉じた目は、斜めに鳴鶴なきつるヶ岬さきまで線を引いて、その半ばと思う点へ、ひらひらと燃え立つような、不知火しらぬいにはつきり覺めた。

とそれは獅子頭ししがしらの緋ひの母衣ほろであつた。

二人とも出て来た。浜は鳴鶴ヶ岬こつぽがけから、小坪こつぽの岨がけまで、人影一ツ見えぬ処ところへ。

ステイションしばいに演劇えんげきがある、町も村も引つづるつて誰たれが角兵衛とりあに取合とりあおう。あわれ人の中の

ぼうふらのような忙しい稼業せわの児こたち、今日はおのずから閑かんなのである。

二人は此処ここでも後あとになり先になり、脚絆きやはんの足を入れ違いに、頭かしらを組んで白波しらなみを被かつぐ

ばかり浪打際なみうちぎわを歩行あるいたが、やがてその大きい方は、五、六尺渚なぎさはなを放はなれて、日影ひかげの如く

散乱ちりみだれた、かじめの中へ、草鞋わらじを突出つきだして休んだ。

小獅子は一層活潑かつぱつに、衝つと浪を追う、颯さつと追われる。その光景、ひとえに人の児この戯たわむ

れるようには見えず、かつて孤児院こにの児こが此処ここに来て、一種の監督の下に、遊んだのを見

たが、それとひとつで、浮世の浪に揉もみ立てられるかといじらしい。但ただその頭かしらの獅子が怒

り狂きつて、たけり戦いくう勢いきおいである。

勝かつでは可よい！

ト草鞋わらじを脱はだいで、跣足はだしになつて横歩行よこあるきをしはじめた。あしを濡ぬらして遊あそんでいる。

大きい方は仰向けあおもむに母衣ほろを敷しいて、膝ひざを小さな山形やまがたに寝た。

磯いそを横よこツ飛とびの時は、その草鞋わらじを脱はだいだばかりであつたが、やがて脚絆きやはんを取とつて、膝ひざま

で入つて、静かに立つていたと思うと、引返して袴を脱いで、今度は衣類をまくつて腰までつかつて、二、三度密と潮をはねたが、またちよこちよこと取つて返して、頭を刎退け、衣類を脱いで、丸裸になつて一文字に飛込んだ。陽気はそれでも可かつたが、泳ぎは知らぬ兒と見える。唯勢よく、水を逆に刎ね返した。手でなぐつて、足で踏むを、海水は稲妻のように幼兒を包んでその左右へ飛んだ。——零ばかりの音もせず——獅子はひとえに嬰兒になつた、白光は頭を撫で、緑波は胸を抱いた。何らの寵兒ぞ、天地の大きな盥で産湯を浴びるよ。

散策子はむくと起きて、ひそかにその幸福を祝するのであつた。

あとで聞くと、小兒心にもあまりの嬉しさに、この一幅の春の海に対して、報恩の志であつたという。一旦出て、浜へ上つて、寝た獅子の肩の処へしやがんでいたが、對手が起返ると、濡れた身体に、頭だけ取つて獅子を被いだ。

それから更に水に入つた。些と出過たと思うほど、分けられた波の脚は、二線長く広く尾を引いて、小獅子の姿は伊豆の岬に、ちよと小さな点になつた。

浜にるのが胡坐かいたと思うと、テン、テン、テンテンツツテンテン波に丁と打込む太鼓、油のような海面へ、綾を流して、響くと同時に、水の中に立つたのが、一曲

かしこかさま
頭を倒に。

これに眩めいたものであろう、啊呀忌わし、よみじの（ことづけ）を籠めたる獅子を、と見る内に、幼児は見えなくなつた。

まだ浮ばぬ。

太鼓が止んで、浜なるは棒立ちになつた。

砂山を慌しく一文字に駈けて、こなたが近いた時、どうしたのか、脱ぎ捨てた袴、着物、脚絆、海草の乾びた状の、あらゆる記念と一緒に、太鼓も泥草鞋も一まために引かかえて、大きな渠は、砂煙を上げて町の方へ一散に遁げたのである。
浪はのたりと打つ。

ハヤ二、三人駈けて来たが、いずれも高声の大笑い、

「馬鹿な奴だ。」

「馬鹿野郎。」

ポクポクと来た巡查に、散策子が、縋りつくようにして、一言いうと、

「角兵衛が、ははは、そうじゃそうで。」

死骸はその日終日見当らなかつたが、翌日しらしらあけの引潮に、去年の夏、庵

室の客が溺れたとおなじ鳴鶴ヶ岬の岩に上った時は二人であつた。顔が玉のような乳房にくつついて、緋母衣がびつしより、その雪の腕にからんで、一人は美にして艶であつた。玉脇の妻は靈魂の行方が分つたのであろう。

さらば、といつて、土手の下で、分れ際に、やや遠ざかつて、見返つた時——その紫の深張を帯のあたりで横にして、少し打傾いて、黒髪の頭おもげに見送つていた姿を忘れぬ。どんなに潮に乱れたろう。渚の砂は、崩しても、積る、くぼめば、たまる、音もせぬ。ただ美しい骨が出る。貝の色は、日の紅、渚の雪、浪の緑。

青空文庫情報

底本：「春昼・春昼後刻」岩波文庫

1987（昭和62）年4月16日第1刷発行

1999（平成11）年7月5日第19刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十卷」岩波書店

1940（昭和15）年5月

初出：「新小説」

1906（明治39）年12月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※章番号は「春昼」から連続しています。

入力：小林繁雄

校正：平野彩子、土屋隆

2006年7月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春昼後刻

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>